

遠視と老視はどこが違うか

遠視は眼軸が短いから、屈折力が弱いからによって起こりますが、どちらの場合も、網膜の後ろでピントが合いません。

したがって、調節をしないで自然に見ると、すべてがぼやけて見えます。遠いところを見るときも、もちろん見にくいのですが、近いところの物を見るほうが、いっそう見えにくくなります。

たとえば、正視の人が二五センチメートルの距離にある物をはっきりと見るためには、四ディオプトリーの調節力が必要ですが、プラス二ディオプトリーの遠視の人は、六ディオプトリーの調節をしなければはつきり見えません。

しかし、子どものうちは調節する力も強く、眼球の発育途上は生理的に遠視ですから、「調節」という努力によって良い視力が得られる場合は、さほど問題はありません。

ただし、遠視の度が強い場合は、近くを見るときも遠くを見るときも、凸レンズを装着します。

次に、老視についてですが、中年になると、遠の調節力が衰えてきます。

できるだけ調節の努力をしてはつきり見える近い距離を「近点」といいますが、四二、三歳になると、この近点が三三センチメートル、五〇歳になると五〇センチメートルになり、それより近く物は、良く見えません。

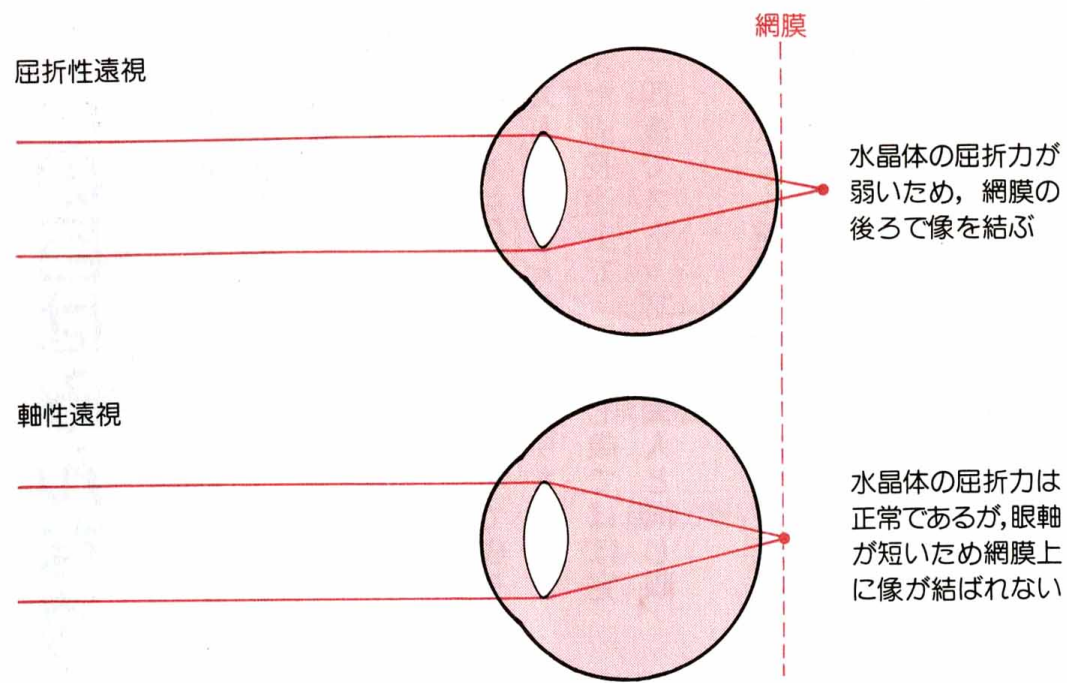
そのため、近くの物を見るときには、凸レンズが必要になってきます。

遠視も老視も同じ凸レンズを装着しますが、遠視の人は、正視の人より余分に調節する必要がありますのをカバーするため、老視の人は、遠くなった近点をレンズで調整するために、眼鏡の使用法、目的も異なるのです。



遠視と老視のしくみ

● 遠視のしくみ ●



遠視は遠くも近くも見えにくいものであるが、老視は老化による調節力の低下から近くが見えにくくなるものである

● 遠視と老視の対処法 ●

〈老視〉



訓練しても回復は望めない!!

近くのを遠ざけないと見えにくくなってきたら、老眼鏡を使う

〈遠視〉



訓練による回復可能!!

基本としてメガネを常用し、裸眼視力が1.0以上の場合は近業時のみに使う